

詰め込むことから弊害が……

山田： 反復ということをおっしゃってますね。まったく反復ということ
は大事だということに気がついたんですけれど。

石井： これが一番大事なんですけど、しかし、これくらい、今の教育で
なおざりにされているものはないんです。

山田： ですから一つ覚えるとすぐ違うことを教えて、繰り返さないとい
うことが……。

石井： 新しく違うことを習うこと、つまりたくさん覚えることが知能を増
すことだと考え違いしています。そのことが今の教育における最
も大きな間違いだと私は思っています。

学習して、いろいろなことをたくさん覚えることが、頭を良くする
ことだと、こう考えている。それよりも、一つのことを徹底して繰り
返し繰り返しやった方が、ずっと頭の働きを良くするのです。

山田： “人生一××”といった言葉もありますね。

石井： 例えば将棋の名人でも、図画の大家でも、その道で一流に達
した人は、みんなそれぞれ素晴らしい人生観を持っていますでし

よう。それと同じことなんです。結局人間というのは、あることを徹
底して繰り返し繰り返しやる、その技量を高めていく、ということが
一番すばらしいことなんであって、何もかも、あれもこれも知って
いるということがいいことじゃないんです。その意味でも、今の学
校の通信簿をご覧になればわかりますように、これが悪い、あれ
が悪い、これも力を入れましょう、あれも力を入れましょう……。

私は教育というのは、最近特にそう思うのですけれど、できな
いものはできないと、早く見切りをつけた方がいい。例えば長島
や王に、野球以外に、何を期待するんでしょう。野球に徹し、野
球のことを朝起きてから夜寝るまで考えても、まだ至らない余地
が一生通じて残っているはずですよ。一つの道でも、そのくらい深
いわけですよ。

ところがあれもやる、これもやる、そのために何もかもついてい
くだけの能力を持っていない人間はみんな、いわゆる落ちこぼ
れと言われるものになってしまう。つまり、落伍者の烙印を押され
るわけなんです。ほんとは落伍者なんていうものはないと私は思
っているんです。どんなに能力が劣ったものでも、何かしら優れ

ているところがあるわけでした。私は精薄学級には直接の関係はありませんけれど、もう三十年近くそういうものと結びつきがあって、よく知っておりますが、あの映画の中で、植本に水をやることを自分の任務だと思えば、雨の降っている中でも水をやる。普通の人を考えれば馬鹿々々しいと思うでしょうが、あれは精薄児だけが持っている優れた美点だと私は思うのです。

山田：普通の子にはやれない、馬鹿々々しいようなひたむきさですね。

石井：私が長く奉職しました東京・四谷第七小学校というのは、新宿で一番先に特殊学級を置いた学校なんです。ですから私は、その特殊学級の子供たちとそこで七年間、一緒に暮らしておりますからよく知っているんですが、あそこは小学校から中学まで九年間、ずっと一貫して学習するようになっているんですが、あそこの子供は、卒業生がみんな会社や工場などの職場で歓迎されているんです。

なぜかと言いますと、いまの子供の持っていない純真さ、一つのことをやらせれば忠実にわき目もふらずにそれをやる。もちろ

んすぐには技量の方が、また知能がともないませんから、応用はききません。そのかわり、言われたことだけは実に忠実に行なう。そのために雇い主から、ほんたによい人を世話して頂いたと感謝されています。映画に出てくるような子供たちのことも、四谷第七小学校にいましたから、よく知っております。

それで私は、特殊学級に限らず、今の教育というものは、そのあり方が根本から間違っているのではないかと思っています。それを何とかして気がついてもらって、この人間の一生を、もっともって意義のあるものにしなければいけないと、そのことを訴えたい気持ちでいるんですけど、なかなか微力で、そういうことができないでいるわけです。けれども、今度映画を見させて頂いて、こういう訴え方を絶えずやっていけば、何よりもわかってもらえるんじゃないかなと思って、ほんとうに拍手したい気持ちで、楽しく拝見いたしました。

山田：モチベーションですね、意欲ということですか、それも先生がおっしゃったように、知恵遅れの子でも意欲が出てくるわけですね。一つの漢字を覚えれば、次のというように……。

石井： それは出てきますね。野杉先生も映画の中でそれを指摘していますね。映画の中で、野杉先生はやっぱりえらいな、と思った点がいくつかありました。北九州の教育委員会の小委員会で、野杉先生が一番最初に言っているところです。「自己身の処理、それから社会的適応の能力を少しでも……」とこう言い始めてね。そして「決まった仕事をみんなと一緒に根気よくやれるといったようなこと、このことが彼らへの教育の原点であり、そのことをどうしたらスモール・ステップで……」ここのところがやはりむずかしい言葉を使っているんですね、一般の人にはわかりにくいなと思ったのですが……。スモール・ステップなんていう言葉を使わないで、もっとやさしい言葉で言えばよかったと、私は思いながら聞いておったんですが……。

山田： さすがに先生は、せりふの一つ一つにも注意しておられる。

石井： それはそれとして、このスモール・ステップということが何よりも大事なんですね。健全な知能を持った子は、ステップが大きくても階段を登っていけます。ところが知能が低い子供たちは、そんな大きなステップでは登れないわけです。与えられるものがあま

りにも能力を超えたものであるために、子供たちは挫折感を味わう。それで意欲がなくなるわけです。

ところがスモール・ステップにしてやって、普通の階段の間に一つないし二つの階段を設けてやりますと、今度は登ることができるものですから、喜んで登るわけです。登ると一段と違った気分になります。視点が高く視野が広がりますからね。だから、学習する興味がまた一段と強くなる。そしてスモール・ステップか一段一段意欲を燃やして登るようになるんです。つまり、だれでも意欲をもって学習するという本質は持っているんです。

「人間というものは生まれながらにしてみんな盛んな意欲を持っているんだ」。私はそんなことをお母さん方に、いつも言うんですよ。ところがその意欲を打ちこわしているのは、母親や教師なんです。

なぜかと言いますと、ほとんどの親や教師は、欠点を指摘すればそれで良くなるもの、と思っているんです。叱咤激励すれば子供が意欲を出すもの、と思っているんです。だけど、欠点を言われりゃ、だれだってショゲルんですよ。決して生き生きとはならな

いんです。ところが「だれだれちゃん是可以るのに」「お前はしようがない」とか、ともかく子供の意欲をそぐような言い方ばかり、親でも教師でもやるわけです。

山田： 確かに言われる通りですね。

石井： 赤ちゃんを見ていれば、強い意欲を持っていることがよくわかります。ハイハイをする、それから立つ、立って歩く。そのどれ一つだって、赤ちゃんにとっては、ものすごい抵抗があることなんです。大体、人間が立つなんていうことは、フォークを立てるのと同じことで、不可能に近いことです。ましてや立って歩くななんていうことは、大変な難事ですが、それを可能にするのは、足腰にある何万という筋肉を微妙に調整することによって重心を取り、倒れないようにするわけです。ところが筋肉調整するなんていうことは簡単にできることじゃない。立ってもすぐに倒れる、一歩歩いただけで倒れる。それこそ大人だったら、「もうオレは歩くのはやめた」という気持ちになるはずですよ。ところがどんな赤ちゃんでも、歩くのを諦めたという赤ちゃんは、どこにもいないわけです。

ですから私は、モチベーションという点なら、申し分のないほど

十分に、人間というものは赤ちゃんのときから与えられている。だからその意欲をうまく満足させ、意欲の向かう対象を一つ一つ克服していけば、そこにまた喜びが生まれ、意欲がさらに強まる。これは野杉先生も指摘していますけれど、「買い物ができるようになって喜ぶのは親じゃない、本人だ」と言っているでしょう、あれですよ。だれよりも本人が一番嬉しいんですよ。その喜びが次の段階をやろうという意欲を湧き起こすわけですね。

残念なことに、それを、今の教師でも親でも知らないんですよ。そして、意欲をなくすようになくすようにもっていく。それが今の教育の世界ですね。

山田： 私の子供でも、悪い意味で言えば、おだてるという言葉ですけどね、何かやると、よくできた と、褒めてやるんです。私よりいまや背丈は大きいんですが、それでも喜びましてね、また次にやるようになるんですよ。

石井： それは子供ばかりでなくて、私たちがさえも、褒められると張り切るものです。私は親御さんたちによく言うんですよ。「Aさんという人が、石井先生は非常に気前のいい人だと言っていました

よ」というようなことを、私が耳にしたとします。そうすれば、そのAさんの前じゃあ、もうサイフのヒモなんてゆるめっ放して、気前のいいところをみせようとするんじゃないか。私はそうします。私に対してそういうりっぱな評価をしてくれた人の前じゃ、ミッチイことはとてもできなくなるんじゃないですか。それが人間の純粋な気持というものではありませんか。思慮分別のある大人でさえも、褒められればうれしいと思う。そして余計いいところを見せようという気持になる。人間って、そういうものだと思います。ましてや、純真な子供がそうならないはずがないじゃないですか。こう言ってやるんですよ。そう言えば親御さんたちも、なるほどという気持でうなずいてくれます。

山田： おだてだとわかっていても、ついサイフのヒモをゆるめる(笑)。

石井： 私には子供が二人おりましてね、上が三十一、下が二十七になります。私はよく子供の前で「ほんとうにうちの子はいい子だ」って、心からそういうことを言います。そのせいかますます子供も、おやじの期待に添おうと努力している様子がみられます。三十

一の大人になって一人前の社会人になって、それで褒めてもらっても、子供がテレくさく思うんじゃないかというようなことを言う人がいますけれど、決してそんなことはありません。やっぱり親が、「ほんとうにうちの子はよい子で、親は幸せだ」と心からそう言えば、子供もそれをいかにも満足気に聞いてくれます。そしてやはり親のその期待にできるだけ添おうと、子供というものは努力するものです。私は、それが子供を一番よくするモチベーションだと、そういうことをよく親御さんたちに言うんです。そういう言い方をしますと、かなりわかってもらえるようなんですけど、やはり気持の上でわかるというのと、日常生活でそれを実行するというこの間は、どうも距離があって、なかなか行なえないようです。

けれども子供を持ったら、褒めるべきところをよく見つけてこれを褒めてやる。もちろん褒めるほどの価値もないものを褒めれば、これは効きません。おだてだとだれもわかってしまいますから...。おだてはいけません。やはり親自身ができるだけ、心から感心するということが大事です。素直に心から喜んでやるということ、これが、一番やる気を子供に起こさせるようです。

山田：先生がおっしゃった逆の意味で、愛のムチという言葉がありますね。私は全国の特殊学級のある学校の連合会長をやっていますので、ときどき映画のこともあって行きまして、親御さん、先生たちからいろんな話をうかがうんですが、愛のムチというのはやっぱり知恵遅れの子でも、尊敬する先生と尊敬しない先生で受け取り方に差が出ているわけです。尊敬している先生から愛のムチをバーンとやられても、お尻をぶたれても反発しない。自分が悪かったんだと反省するわけです。

石井：おっしゃる通りです。

山田：その点、いまの教師は愛のムチというのを誤解している。愛のないムチを打ちちゃって、子供たちから信頼されているかどうかという問題をつきつめて考えていないような気がする。ほんとうに信頼されていたら、指摘されても、愛のムチを一発お尻にぶたれたって、決して反抗したりしません。その点ぼくは、いまの教師の姿勢がきちりしてない。これが教育という中で大きな力だと思うのですが、それを先生方は、忘れてもらっては困る。

つまりいいことをしたときは、いいと言ってくれる先生だったら、

子供たちは信頼しますよ。ああ褒められた、もっといいことをしようという気になりますよね。ところがめったやたらに怒ったりしている先生は、信頼されなくなるでしょう。そのときほんとうに悪いことをして、「お前、なんだ」と言っても、その子供は反発するだけ。そういうことが落ちこぼれ人間を作ったり、ヘルメットかぶってどこかに暴力をやりに行くような人間を生むことになっちゃう。何か、愛というものが抜けたムチが多すぎるんじゃないかと思います。